

# 平成23年度 第3回 鶴岡地域審議会

## 次 第

日 時 平成23年10月28日 (金)  
午後1時30分～

場 所 鶴岡市役所  
3階 議会委員会室  
4階 401会議室

1 開 会 (分科会毎) ※会場 地域コミュニティ分科会：議会委員会室  
産業経済分科会：401会議室

### 2 協 議

- (1) 鶴岡地域審議会のこれまでの議論の内容 (資料1) (資料2)
- (2) 各協議テーマの具体的な解決策・施策について

3 全 体 会 ※会場 議会委員会室

- (1) 分科会毎での協議内容報告
- (2) 提言書に向けて
- (3) その他

4 閉 会

## 第3回 鶴岡地域審議会 名簿

### 審議会委員

No.	所属団体・役職名等	氏名	備考
1	鶴岡商工会議所 会頭	早坂 剛	審議会会長(産業経済分科会)
2	鶴岡市町内会連合会 会長	山田 登	地域コミュニティ分科会長
3	鶴岡市農業協同組合 代表理事組合長	今野 毅	産業経済分科会長
4	鶴岡市自治振興会連絡協議会 会長	五十嵐 寅吉	地域コミュニティ分科会
5	(社福)鶴岡市社会福祉協議会 理事	茅野 進	
6	学識経験者	五十嵐 松治	
7	鶴岡市PTA連合会 副会長	高山 利幸	
8	鶴岡市体育協会 会長	稲泉 眞彦	
9	鶴岡市老人クラブ連合会 会長	後藤 輝夫	
10	鶴岡市婦人会連合会 会長	斎藤 春子	
11	鶴岡市消防団 団長	阿部 和博	
12	学識経験者	今野 利克	
13	学識経験者	早坂 裕子	
14	鶴岡市民生児童委員協議会連合会 会長	竹内 峰子	
15	出羽庄内森林組合 理事	五十嵐 吉右衛門	
16	山形県漁業協同組合 理事	本間 昭志	
17	鶴岡市観光連盟 会長	三浦 惇	
18	(社)鶴岡青年会議所 直前理事長	佐藤 正廣	
19	学識経験者	本間 孝夫	
20	学識経験者	荘司 正明	

### 市役所

No.	部課・役職名等	氏名	備考
1	企画部地域振興課地域活性化推進室長	吉住 光正	産業経済分科会
2	企画部地域振興課地域活性化推進室係長	三浦 裕美	地域コミュニティ分科会
3	企画部地域振興課地域活性化推進室主任	飯野 剛	地域コミュニティ分科会
4	企画部地域振興課地域活性化推進室	進藤 希世加	産業経済分科会

## 鶴岡地域審議会のこれまでの議論の内容（全体）

### テーマ I

#### 大震災を踏まえた防災力の向上と地域コミュニティの連携

#### 1. 現状と課題

##### ▼大震災後の防災力の向上

今回の震災を経験して、食糧の備蓄あるいは供給体制も含めた流通システムを、行政も含め、個人や団体でも、トータル的にシステム構築しておく必要がある。また、非常時の交通・通信、医療機関、避難する場所等についての再点検や、冬期間の災害対応、ヘリポートの設置など、総合的な行政施策の見直しが必要である。さらに、庄内空港、高速道路、酒田の港等の庄内地区の交通網の整備や電力供給基地等のインフラ整備が今後の大きな課題である。

また、今回震災で一番大きい問題の一つは、情報がどう伝わるかという情報伝達体制であり、災害時に情報が入らないということで、ボランティアの活動が非常に停滞し遅くなったというような課題もある。いろいろな面の危機管理や情報の収集・伝達について、非常時の対応がどのようになっているのか今一度確認するとともに、行政と市民との情報共有に努める必要がある。

また、今回の地震・津波に遭われた三陸沿岸地域は、防災意識が高い中で、あれだけの人的被害があった。鶴岡市には各小学校単位に自主防災組織があるが、組織内の連携について課題もあり、有事の際に組織が機能するか心配な面がある。今後、地域住民の意識を高めるためにはどうすればいいのか、防災訓練のあり方や人材育成などを含めて検討していくべきである。

#### 2. 意見の概要

##### ▼市民の災害情報の共有と防災意識の向上

大震災を機に、市民一人一人が自らの生活を見つめ直すことが大切である。このため、今回の震災を踏まえて、行政から市民への情報提供や学習機会の提供、防災意識高揚の催し等を行いながら、市民との情報の共有化を進めるべきである。

また、鶴岡市の防災計画、防災マップについては、今回の災害を踏まえて、早急に見直しを行い、市民にわかりやすい具体的な計画づくりや、資料作成に努め、市民への周知を徹底すべきである。さらに、非常時の防災対応として、災害時の地域リーダーの育成を図り、地域の防災リーダーが中核となり、地域の防災活動を進めることを提言する。

さらに、建物や道路、河川等、地域の防災点検や情報伝達、その機能などを含めた実践的な訓練により地域の防災力を高めるとともに、地域の連帯感を育てる好機として事業の推進を図るべきである。

### 3. 具体的な解決策・施策

#### ▼防災意識の高揚

- 市民を対象に、地元の大学等を活用して、地震とか津波とか原発の恐ろしさについての専門的な学習の機会や情報の提供を受けられる場づくりを行うこと。
- 防災意識高揚の催しや広報活動、自主防災組織や消防団研修等、さらに充実して積極的に開催のこと。
- 今回の震災、津波の被害、問題点等の情報提供を行ったうえで、地域の皆さんがどう感じているかを話し合うため、町内会あるいはコミセン単位の座談会を開催し、市民の防災意識の高揚に努めること。
- 防災無線としてのコミュニティFMの開設、活用について検討のこと。

#### ▼防災計画・防災マップ等

- 市で想定している災害や被害予測、市民の防災対応マニュアル等について、市民が理解しやすい防災計画、防災マップに見直しを行うこと。また、市民向けの概要パンフレットを作成するとともに、高齢者や災害弱者にもわかりやすい、目でみてわかるような資料づくりに配慮すること。

#### ▼防災訓練

- 防災訓練については、緊急避難時の持ち出し品の点検、避難時の車イスの手配、緊急避難する場所への実地訓練等、より実際の災害時を想定した実践的な訓練に努めること。また、これまでと違う時間帯に避難訓練を設定するなど、地域の緊迫感と連帯感が生れる訓練となるよう取組みの工夫を行うこと。
- 市全域での広範囲な地震等の災害を想定し、市全体の大掛かりな防災訓練を実施する

ことにより、消防本部や行政、市民の動き・役割など、災害発生時の全体の流れや情報伝達の把握に努めること。

#### ▼ボランティアの連携構築

○災害時には、行政と民間ボランティアとの情報共有が非常に大切である。今回の震災を教訓として、行政とボランティア、また災害地のボランティアセンターとの協力連携などを点検・見直しのうえ、再構築に努めること。

#### ▼災害時を想定したリーダー育成

○災害時の地域リーダーの育成を図る必要があり、県の消防学校等の教育機関を活用するなどして、今回の震災を踏まえた学習プログラムの開発や、専門的な研修、学習の機会を提供していくこと。

○消防・防災担当経験のある市職員OB等の人材を活用して、地域が推薦したうえで、災害時に行動できる地域の防災リーダーを配置し、町内会、コミセン単位の地域防災の中核的な役割を担ってもらい、地域の防災力向上を図ること。

○地域の防災リーダーが中核となり、有事のときに機能できる隣近所周辺の防災の行動班をつくるような取り組みを検討のこと。

## 鶴岡地域審議会のこれまでの議論の内容（コミュニティ分科会）

### テーマII

#### 地域コミュニティの連携と高齢者への対応

#### 1. 現状と課題

##### ▼地域活動の担い手の確保と連携・協力体制

住民の地域への帰属意識が低下し、少子高齢化と相俟って担い手不足の要因となっている一方、団塊の世代が退職期を迎え、地域活動の新たな担い手として期待される。

今後は、地域活動への参加者の裾野を拡大するため、活動内容の情報発信に努めながら、地域活動に対する意識の醸成を図るとともに、地域課題を解決へ導けるリーダー育成や多様な組織・団体の連携・協力により、担い手の確保を図る必要がある。

また、担い手の減少により、単位自治組織では解決できない課題が増えてくることから、小学校区単位の自治組織（自治振興会等）のあり方や単位自治組織との役割分担・連携について見直しを行っていく必要がある。特に大災害時の情報収集・伝達や安否確認については、町内会、民生委員、消防等の関係機関が、各団体の横の連携や協力体制（役割分担）を構築していく必要がある。

##### ▼高齢者、要支援者への対応

従来は、多世代が同居し家庭内で役割を分担したり、隣近所が助け合って生活が維持されてきたが、核家族化の進行や、近隣関係の希薄化などにより、そうした機能の低下が危惧される。特に、高齢者をはじめ要支援者については、情報を地域で共有し、地域内の連携や協力により見守り支援する体制を構築していく必要がある。

また、今後、高齢者等が安心して暮らせる生活を支えるためには、防災対応、生活交通、買い物、ごみの分別等、高齢者を手助けし高齢者が安心して暮らせる地域づくりが課題である。

#### 2. 意見の概要

##### ▼地域活動の連携・促進と高齢者等の支援

コミセン単位、町内会単位の日常の地域活動においては、関係機関・団体が協調・協力できる横の連携が重要であり、今後、町内会でも、高齢者、要援護者の見守り支援な

ど、災害時を含めた具体的な活動が必要となってくる。このため、行政、町内会、民生委員、社協等の各関係団体等が連携協働した対応をしていくため、まず各関係団体等のリーダーによる学習・研修の機会や話し合いの場づくりが必要である。

また、地域のコミュニティ活動において、若者あるいは子育て世代を積極的に巻き込んだ地域の活動を促し、若い世代に参加の裾野を広め、地域活動のリーダーの発掘・育成に努めるとともに、ボランティアや地域を支える福祉協力員等の人材育成を図る必要がある。

さらに、近い将来、高齢者の割合は飛躍的に増加することが予想されており、高齢者の交通確保や災害時対策、高齢者の買物支援やニーズに応えるような商店街づくりに取り組むことなど、高齢者が安心して暮らせる地域づくりへ向けて、より一層の取組みを提言する。

### 3. 具体的な解決策・施策

#### ▼地域の活動・連携

- 行政、町内会、民生委員、社協等が協力体制や役割分担を確認するため、各関係団体のリーダーが集まる座談会等を開催し、活動の検証や情報交換をする場づくりを行っていくこと。また、関係団体のリーダー研修等の学習・研修の機会を積極的に提供していくこと。
- 市内の地区・町内会においても、地域内の組織が連携して要援護者のマップづくりを行っている事例や、地域活動に若い人が多く参加している先進的な事例がある。地域活動の参考事例として調査を行い、学習・研修の機会等で広く周知を図ること。

#### ▼高齢者への支援

- 近い将来、高齢者等の買物難民が大きな課題となる。市街地、中山間地の日常生活品等の買物状況について調査のうえ、森の産直カー、海の産直カーの取り組みを活用した買物難民対策等を検討のこと。
- 高齢者の交通手段が失われているという実情がある。市街地に通院治療に行く場合など、交通手段を持たない高齢者に対し交通確保対策や優遇策を検討のこと。

## 鶴岡地域審議会のこれまでの議論の内容（産業経済分科会）

### テーマⅢ

#### 市民参加による観光文化都市の推進

##### 1. 現状と課題

###### ▼街歩き観光客の増加

近年、市内には、夫婦連れや友達グループ、主婦のグループなどが、リュックを背負いながら歩いている姿が多く見受けられる。特に、致道博物館、藤沢周平記念館をはじめとした鶴岡公園周辺には、日中に街歩き観光をしている人が多いし、鶴岡駅周辺には、ビジネスホテルや商店街などの集積機能があり、宿泊客などが歩いている姿が見受けられ、多くは個人客である。団体客はバスで動き、ガイドもいるが、個人客にはその案内の不便さや一方通行の道路交通に不平不満を持っている人も多く、城下町「鶴岡」の面影が薄れているとの声も聞かれる。

来訪した人が、どうやって街歩きをすればいいのか、どういう歴史的なものがあるのか、ガイド的な機能は必須の条件である。

###### ▼鶴岡らしさの発掘と情報発信力

観光客はありきたりのものには魅力を感じない。これからは、この地域の歴史と文化と環境をいかに売り出していくかが重要である。豊かな食文化など、まだ十分地域の特徴として出ておらず、もっと文化としての掘り下げも必要である。このため、鶴岡らしさを前面に出した市民の活動をもっと広めていかなければならない。

また、鶴岡では、様々な催しやイベントの開催、多種多様な事業展開がされており、自然豊かで非常においしい産物等もたくさんあるが、それをどこに向け、何のためにやっているのかということの情報発信力が弱い。もっと横の連携を図りながら、外に発信して、人を呼びこむ動きを強めるべきである。

特に、観光は裾野が広くてあらゆる産業を網羅しているので、そのネットワークや、各業界のいろいろな情報を横に連結・集結する仕組みや取組みが必要である。地元の企業の中には、全国規模の会議に必ず鶴岡のパンフレットを持参しているところがあるが、市内の事業所は、いろいろなところと取引があるので、そういう人たちに宣伝していく



だけで、相当な観光誘客、製品の販売促進にもつながっていく。中央に本社がある事業所も相当数鶴岡にあり、どんどん鶴岡をアピールしてもらいたいような取組みが必要である。

## 2. 意見の概要

### ▼市民参加の観光実践

観光による交流人口の拡大は、全産業への波及効果が高い。このため、観光産業に携わる人だけでなく、市民、行政、企業等が一体となった取り組みを進め、鶴岡市全体のイメージづくりや活性化を図るべきである。

このため、企業・各団体のネットワーク網を活用するなどして、観光・物産などの積極的な情報発信を行うとともに、市民参加による鶴岡の城下町らしさを生かした魅力ある街並づくり、鶴岡らしい自然・歴史・文化の資源を生かした体験型観光など、その推進力として、市民一人一人が、観光のおもてなしを見える形で実践することにより、市民参加型の観光文化都市の推進を図るよう提言する。

### ▼観光案内拠点の整備

市内の観光案内の拠点機能を今一度見直す必要がある。駅前に観光案内所があり、ガイドを紹介する手立てはあるが、駅を利用する人以外、特にマイカーで来た人には観光案内所はわかりづらい。市民からも、あるいは外から来た人もわかるような場所の設定、人の対応の仕方が求められている。

このため、鶴岡の街中観光に焦点を当て、市民にもわかりやすく、現在も観光拠点の一翼を担う駅前周辺について、いろいろな観光案内機能を備えた情報発信拠点として再編し、市民が参加する観光実践活動の拠点とすることを提言する。

## 3. 具体的な意見

### ▼鶴岡の情報発信力の向上

○市内の各企業の取引先や各種団体の全国規模のネットワークを活用して、鶴岡の観光、物産を発信・PRし、観光誘客や製品の販売促進につなげるなど、各組織の連携を図りながら外に向け大いに情報発信を行っていくこと。

○市民、行政、企業等が、鶴岡の情報発信を行う場合、統一した名称的なもの、例えば、すべてにおいて庄内藩を入れた名称での観光PRを行うなどの態勢づくりや鶴岡

市の情報を収集、企画、宣伝等を行う活動組織をつくるなどに努めること。

- 観光や情報発信の分野においては、もっと若者を前面に出し活動を行う必要がある。特に、公益文科大学、山形大、芸工大等と連携して、若い人の意見をもっと取り入れながら、観光情報の発信やネットワークの構築に努めること。
- 観光カリスマ的な人材等を外部から招き、鶴岡の観光の窓口として事業の企画や展開、情報発信を行うことにより、一層の鶴岡市の観光活性化に努めること。

#### ▼市民による観光ガイドの推進

- 市の観光パンフレットは、市民がどれだけ理解して外にアピールできるか、聞かれた場合どこに案内するか、観光ボランティアの育成とともに、市民がガイドできる、市民目線でのパンフレットの作成に努めること。
- 車で来た観光客が立ち寄りそうなところで、市民にもわかりやすい場所、例えばガソリンスタンド、サービスステーション、ホームセンターなどにパンフレットを配置し、市民がパンフレットを利用して観光案内できる環境整備に努めること。

#### ▼鶴岡らしさの創出

- 城下町らしい街並づくりには、中心街の施設配置、景観整備が重要であり、市民運動による取組みが効果的であることから、市民の機運醸成に努めること。
- 鶴岡の魅力ある歴史的建造物や街並の保存に努めること。特に、鶴岡に残る古民家は、鶴岡らしい歴史建築を今に伝える希少な価値があり、早急な保存・整備が望まれることから、街並保存に関する制度の充実やその周知を図るとともに、市民・団体による取組みを支援すること。
- 鶴岡ならではの伝統工芸等を生かした体験型観光や、農山漁村地域の資源を活用した体験交流、地域・市民の一品運動などを推進し、地域全体の連携した取組みや情報発信を促すことにより、市民が率先して観光誘客に取り組める環境整備やネットワークづくりを行うこと。

#### ▼観光案内拠点の整備

- 駅前周辺全体の将来構想をつくった上で、マリカ東館の空室やジャスコ側の跡地スペースを有効に活用した、観光案内機能の拠点化を進めていくこと。
- 駅前周辺の観光案内機能として、例えば観光ガイド、レンタカーの案内、観光タクシーの手配などの基本的機能とともに、観光案内と地域の農産物、加工品が一堂に揃

う観光物産機能、駐車場の設備等を融合した拠点機能を集積し、鶴岡市全体の観光情報拠点としての活性化を行うこと。

## ＜防災関係の意見＞

コミュニティ分科会・産業経済分科会

## ▼震災の経験より災害の対応・点検

- 本当の豊かさ、本当の幸せとは何かという視点からこの大震災に向き合い、もう一回自分の生活を見直すことが非常に重要ではないか。
- 便利さ、豊かさを追求したのが一番の大きな災いであり、今回は反省すべき時期ではないか。
- 今回想定外の災害を経験してお互いに協力をする事の大切さなど、私たちが失っていた考え・想いが必要だと改めて感じた。
- ガソリンがなかった、商店に入っても入用な物が品切れであったことについてはいい教訓である。
- 食料に対する地域の防災あるいは供給体制も含めた流通システムを、行政も含め、個人や団体でも、トータル的にシステム構築しておく必要がある。
- 庄内空港、酒田の港等の庄内地区の交通網の整備がこれからの大きい課題である。電力も含めて、インフラの整備を大事にしていかなければならない。
- 東北地方が元気を出していくためには、物資がきちんと流通しなければならない。石油とかも日本海側にきちんと配分できることが、今後は重要である。
- エネルギーの常々に対する使い方、浪費といった意味では、生活全般に対しての小さいときからの教育面でも、何か起きたときの対応のマニュアルを浸透させるべきでないのか。
- 食糧の備蓄を含めて、防災センターについて考える必要がある。また、非常時の交通、通信、医療機関、伝達、避難する場所等についての再点検や、冬期間の災害対応・ヘリポート等の総合的な行政の施策が必要である。
- いろんな面の危機管理や情報の収集について、非常時の対応がどのようになっているのかもう一度確認する必要がある。
- 今回震災で一番大きい問題は、情報がどう伝わるかという非常に大きい問題だったと認識している。
- 今後さらに大きい余震が来る可能性があり、行政としても3月11日と4月7日の経験を生かし、その際の対応等今のうちに考えておくという緊急的な課題がある。
- 災害時に、地域の情報が入らないということで、ボランティアの活動が非常に停滞し遅くなったということがある。早急に対応しなければならないような場合は、行政とボランティアセンターの窓口を一本化し、行政の方からボランティアセンターとかボランティアの民間の方に連絡を頂くということが、必要でないだろうか。
- 以前2005、6年頃に、市民有志の方で、コミュニティFM立ち上げの話があった。今回の災害を受けて、現在石巻とか、気仙沼等々で被災地の方でも、コミュニティFMを立ち上げて、防災無線としての活用がされている。防災無線としてのコミュニティFMということも、検討いただきたい。

## ▼防災計画・防災マップ

- 鶴岡市の防災計画も、大幅な見直しが必要であり、今後防災計画については、一步進んだ具体的な計画がほしい。
- 防災計画をもう少し簡単にわかりやすくして、市民との情報の共有を諮っていく必要がある。
- 今ネットで水害のハザードマップのすごい立派な資料が見れるが、資料を見て本当に日常の暮らしに生かせるかというほとんど目に触れないだろう。
- 市民が分かりやすい防災計画、防災の対応の仕方、そういうものが、立派でなくてもいいので、鶴岡で考えている災害、それがどの程度の被害が予測されるのか、そういうのが目でみて、高齢者とか、そういう人方が分かるような資料にまとめてほしい。
- 住民の側に立った分かりやすい、防災計画、防災マップ、そういったものは是非必要だ。早急に対応してほしい。
- 酒田市の場合、津波のマップの、非常に詳しいマップが出来ていたようだが、市独自でなくても、県で出ているところがあるようなので、それを参考に早急に対応して欲しい。
- 今回の大震災をチャンスとして、市は今までない画期的な、思い切った提案をしてみることが大切でないか。防災計画は、計画だけでは実際は機能しない。市民が具体的な避難場所の状況がわかり、どういう行動をとればいいのかという、見える形まで具体化した計画にして指示をしていただきたい。

## ▼防災意識の高揚・訓練

- 地震とか津波とか原発というものの恐ろしさを、地元の大学を活かして、専門的な学習の機会や情報の提供をして欲しい。防災意識高揚の催しや情報の提供広報活動を積極的にやっていただきたい。
- 原発に対しては自主防衛がこれからも出来ることなので、最悪の事態を踏まえての情報と避難の仕方とかを鶴岡市の方からも、はっきりと明示してほしい。
- 三陸沿岸は防災意識が高い中で、あれだけの人的被害があった。地域住民の意識を高めるためにはどうすればいいのか、自主防災組織や地域の消防団を含めて考えていかなければならない。
- 訓練が一番大事なので、訓練して日頃の力をつけたいと思う。
- 毎年やっている防災訓練も、例えば夜避難訓練をすれば若い人も出てくれるだろうし、地域の連携に生かしていける。緊迫感と連帯感を育てるいいチャンスなので、是非防災が地域で生きて来るような取組みをすべきではないか。
- 市全体として11日を防災総合活動をする日というようなこともやったらいいのでないか。緊急避難時にどんな物を持ち出すかという点検も必要だし、足腰の動かない者たちが避難するのに車イスが充分あるのか等、緊急避難する場所への訓練をセットしていくようなことも必要ではないか。
- 鶴岡で、地震だったら市全体での大きな形での地震時を想定しなければならない。このため、モデル地区での防災訓練だけでなく、市全体での防災訓練をやり、その場合に消防本

部、役所ではどう動くか、その流れみたいなものが全体みんなで取り組むというのも考えてみてはどうか。もう少し規模の大きい訓練を考えていかないと、有事につながらないのかと思う。

- 学区単位とか町内会単位でかなり大規模な訓練もあるようだが、どこでやっているのかというPRが徹底していないのではないか。ある程度大規模な訓練がある場合は、他の地域住民にお知らせをするという事も必要なのかと思う。

### ▼地域防災力の向上とコミュニティ

- 地域防災力の向上の中で、やはり情報伝達だとか、消防団員の地域リーダー教育、あるいは非常時の組織育成、非常時の回避可能な通路の点検、確認という、この辺をもう少し議論をする必要がある。
- 地域のコミュニティづくり、日常のコミュニティづくりというのが大事である。三陸の災害を聞くと、早く逃げなさいという声かけをしたところは災害がなかったと聞く。隣近所の声かけ見守り支援というのは、今後大事だろう。
- 地域コミュニティの安心・安全、安定体制については、地元にあるセンターや倉庫の点検、情報の伝達とその機能、地域の建物や道路、河川等の点検とともに、避難訓練の改善が望まれる。
- 大災害時の情報伝達とか情報収集とか安否確認とか、我々町内で何をどうすればいいのか、そしてどこに避難すればいいのか、今後、いろいろ勉強しながら解決策、対応策を考えていかなければならない。
- 地域のみんなで助け合いができるのか、そこが大事と思う。町内会、コミセン単位等、地域の皆を集めて、ああいう津波を見てどう思うかという座談会があったら効果がある。
- 防災センターの中で連携が進まない。自主防災はあるけども、その中で横の連携、組織の連携を大事にしていかないと、早急に対応が出来ない。
- 自主防災組織というのは、旧鶴岡市内の各小学校区単位にあるが、地域の方から連携を深めるような活動をお願いしたい。
- 自主防災組織としての連携が進んでいる地域もある。防災だけでなく、地域と一体となった活動をしていきたい。

### ▼災害時のリーダー

- 震災対応がニュースで流される中で、非常時のリーダーのあり方としてどういうものが教訓として残せるのか。大震災の中で、先人の知恵とか、昔から教えられていることをきちっと見直すことが、一つ大切なことだという気がする。
- 人の力を活用するということで、人を育てておくという、防災に対して強い人間関係を育成していくことが大事ではないか。
- 非常時のリーダーとして避難訓練が行き届いているかどうかが大変である。そういう非常災害時のそのリーダーをどのように育成するかという、育成が大事なのではないか。
- 情報伝達というのは、今の段階では、各隣組長さんが、連絡の責任にあたるというふうになっているが、町内会長さんは毎年変わって、防災の時は役立たない。町内会の活動に必

ず参加してくれる方、信頼していただければよい人を防災の非常災害時の連絡員にこれからは選んでいきたいと思います。防災についてはやはり固定した人をきちんと決めていく必要があるのではないかと感じます。

- 非常時災害時の地域のリーダーの育成のために、県の消防学校を教育機関として活用出来ないか。地域の中で、防災の時に伝達も出来るような行動力のある人、こういう人達をまず率先して、地域が推薦して専門的な研修や学習を積んでもらいたい。これを充実させて市民がそのリーダーとなって、三軒でも五軒でもそのぐらいで、動けるような防災の行動班をつくるべきではないか。
- 防災の指導員の資格というのをあの当時受講した。その上を求めて講師の資格を持っている。市で毎年少しずつ上の段階ということで、地域の中から推薦してもらい研修を受けた経緯がある。突然の時に何が出来るかと思ったが、火事の時、怪我したときの対応がきちんと出来る。そういう人を一人でも増やしていくことが、これからの課題と思う。
- リーダーは一養成していかなければならない。そこは役所がリード取って前向きに考えてもらいたい。防災の足の地に着いた活動として、そういうリーダーの養成も大事な役目である。
- リーダーの世代交代の時期にきているので、リーダー研修が必要である。
- 地域コミュニティにおいて、若者あるいは子育て世代を積極的に巻き込んでの活動を積極的に行い、リーダーの育成を図ってはどうか。
- 地域審議会のヤング版として、公募なり募集して機会を設けたらどうか。次の世代の橋渡しとなり、いろんな意見が出てきて集約されると思う。例えば、夜間に、そういう世代のこういう場を設定するとか、夜間議会とか、日曜議会とか、傍聴の機会があれば、なお裾野が広がっていくと感じる。

## <地域コミュニティ関係の意見>

コミュニティ分科会（買物難民関係は産業経済分科会より）

### ▼地域の活動と連携

- 関係機関・団体との協調・協力の面において、横の連携をどう図るか。協力体制（役割分担）を確認する場が必要である。
- 地域活動に対する住民の理解が不足している。サービスは受けたいが、担い手にはなりたくないという感情が基底にある。
- 行政、町内会、民生委員も社協も一緒にやりましょうという発想でいかないと、連携協働は非常に難しい。各関係団体のリーダーが集まって、情報交換連携していくことが大事でないか。上部のほうで座談会をすとか、検証をすとか、そういう機会をもうけてほしい。
- 三団体、町内会長、コミセン、社協、その他民生委員、そういう団体の連携を密にして、今、こういう実態なんだと皆で事実をつかんだ上で話ししないと、やはりうまくいかない。
- 町内会と社会福祉と、コミセンと民生委員の代表が入って、そこでいろいろ課題を出し合って調整したり、共通理解を図るといふ会をやっている。代表者だけなので、もっと下まで集まって話し合いをしたいという要望があり、そういう機会も作っていかねばならない。
- 町内会の中に、社会福祉もあり、防犯もあり、交通安全もあり、それぞれの組織がまとまって地域が行動できるように、やはり横の連携を図り、月ごとの運行とか、年間計画とかをつくり、お互いに理解していなければならない。
- ボランティア精神が薄れている。地域活動に消極的な人が多くなっている。ボランティアや地域を支える福祉協力員等人材の育成を図っていくような手立てを講じる必要がある。
- 地域の活性化のためには、是非とも遊学の精神を持ってもらいたい。よその地域に学ぶ、学びあうことが大事だと思う。特にこれから小学校の小規模校の複式の解消ということで統廃合が必須である。相互に遊学し合って、学びあう、そして情報をもらう、あるいは方法を学ぶというようなことをやっていかねば、地域の改革にはならない。
- 青柳町は自分達くらいの親の参加率が非常にいい。もし、若い世代とかが、こういう地域の活動に入っていきかけがなかなか出来ない町内会とかに対しては、青柳町には青年会があるということ、参考例として知っておいていただきたい。
- 話し合う機会、顔が見える活動が必要。きめ細かく（＝だれがどこで何をするか）示すことが必要である。活動事例集を活用したいし、多くの人に見てもらいたい。
- 市街地の保育園は順番待ち。特に乳幼児を受け入れ出来る園が少ない。郊外地では学童保育の設置が課題である。放課後の保育事業を自治組織で運営する仕組みを検討できないか。
- 子どもたちの部活動等の情報を地域の住民が共有し、応援、顕彰する取組みを推奨してはどうか。
- スポーツに対する理解を深めていただき、地域の活性化、進展に供するような動きをし



ていく必要がある。全国大会に出場するなどスポーツで活躍する子どもたちは、地域にとって明るい話題であり、地域で共有していくべき。

- 三瀬小では母親たちによって人形劇が行われ喜ばれている。地域を元気にしようといういろいろな意見が出てきている。子育てするなら鶴岡といわれるようにしたい。

### ▼高齢者、要支援者への対応

- 地域福祉の立場からすると、要援護者、体が弱い人をどう見守って、どう訓練の中にとり込んでいくかを町内会活動として重要視していかなければいけない。町内会には、見守り支援だけでなく、要援護者そういう災害に弱い方、障害者を含めた方々に対する、防災を含めた実際活動を具体的にやって欲しい。
- 特に高齢者の一人暮らし、要支援者これに対する対策をもう一度見直す必要がある。町内会で全部やれと言われても、実際無理な面がある。
- 個人情報保護の関係で高齢者支援も難しい状況である。施設へ入居して空き家になっても情報が入らないし、敬老会の案内名簿を作るにも、直接市役所に行く必要がある。
- 個人情報保護の観点との兼ね合いを整理しながら、高齢者をはじめ要支援者の情報を地域で共有し、関係機関・団体の横の連携や協力体制（役割分担）を構築していく必要がある。
- 民生委員の役割も重みも増す状況が生じているが、欠員補充がされない状況の中で、今回のような災害起きた時に一体どうなるのかという危惧がある。こんな時こそ福祉行政に携わる行政の力、支援が何より必要である。
- 三瀬の場合は、民生委員だけではなく、町内会長、消防をふくめ、すべての合同のもとで要援護者、マップをつくった。どんどん高齢化率が高くなる中で、いつ何が起きるか分からず、民生委員だけの資料ではだめだ。私たちがいない時でも、隣の組長さんとか、会長さんが対応できるような、そういうものを目指して立ち上げた。この話を、それぞれの単位の会長さんと是非話し合ってみたい。
- 高齢者もずっと病院だとか施設じゃなくて、今度地域の中に戻しますよというのがこれからの医療だということを知った。一緒になって、情報共有しながら対応していくようなシステムでないと地域の中ではいろんなことが解決できない。大事なものは、地域でネットワークを作っていくことだ。
- 10年、20年、30年後を考えた時に、ぜんぜん違う地域になっているのかなと思う。そう考えると、高齢者をいたわるような形での防災的なものの考え方を起こしていかなないとだめなのかなと思う。
- 見守り支援、地域福祉では、町内会長と民生委員と全然違うという発想ではなくて、住民の幸せのために協働していくという発想で進めていきたいと考えている。
- 守秘義務と情報の共有化という点で、やはり町内会長も情報をきちっと把握していなければならぬし、当然、民生委員さんの方でも、そういったことについてきちっと整理をして、地域の弱者とか、困っている方々の状況を把握しておかなければならない。ただ問題はその情報をどういうふうに活用していくかという、その活用で誤解を招いたり、様々扱い上問題が出てきたりということがあって、やはり丁寧に慎重に取り扱っていかねばならない。
- 高齢者等の買物難民に対応した民間企業の取り組みとして、県内でも生協の移動販売車が

上山市、酒田市でも始まる。鶴岡でも、その考え方をまとめていく段階に来ているのではないか。

- 旧市内が買い物難民化している。森の産直カー、海の産直カーの取り組みを活用して、買い物難民対策の一つとなるよう検討のこと。

#### ▼若い世代の育成

- 若者が非常に厳しい状況に置かれている。彼らの多くは蓄えの殆どない状況にあり、今こういう状況の時こそ、やはり若い人達を、きちっと支え、若者の働く場の確保に全力を挙げていかなければならない。
- 頑張れる若者をちゃんと育て、次の世代、次の世代と引き継いでいく、その自覚が我々は今少し失いつつあるのではないか。

## <産業関係の意見>

産業経済分科会

### ▼観光客の受け入れ

- 夫婦連れとか友人で観光してる人は、10年前に比べてたらものすごく多くなった。藤沢周平先生の小説映画などの影響が大きい。松尾芭蕉の遺跡を巡るということでウロウロしている人がいっぱいいる。そういう人から言われた事は、非常にいい町だけど、交通が怖い。マナーが非常に悪いということ。
- 住んでる我々が、お客様をもてなすという気持ちがなければ、どんな施策をやってもだめでないか。交通マナーと伴に人の心やっぱり我々変えてかないと。そういう市民運動が大事でないか。
- 観光で一番大事なのは市民としての心の部分とマナーの部分である。
- 観光を中心とした交流人口の拡大は、全産業への波及効果が高い。
- 観光面では、とにかく先手を打った行動とか、安心・安全の庄内という取り組みが非常に大切だ。そして観光だけでなく、全ての企業産業が、こういう取り組みを強化して進めることが鶴岡の活性化にも繋がっていくのではないか。
- 地域が一丸となって売っていくには、情報を集約化し解決していく窓口と仕組みが必要である。
- 若い人を問わず自分でやりたいという、そういうカリスマ的な人を外部から連れてきた方がいい。そういう人から観光の窓口になってもらい、企画をやらせたり、情報発信とか、そういう事をやらせたら違うと思う。
- 仙台駅前にバス乗り場、庄内行きの表示、宣伝が何もない。仙台に新幹線で来て高速バスで乗り換えて庄内に来る人にとってはわかりにくい。気がついた時にそのことを市役所の観光課や会議所でもいいが、これらの情報を集めて一つずつ解決していくような窓口、仕組みなど、運動的にやっていかないと元気になっていかないのではないか。
- 東京にある江戸屋敷（東京事務所）は、市の観光や農協の関係も産物を持ち込みながら一生懸命PRしているが、耳に入ってこない。様々な事業あるいは交流を毎年やっているのですが、もっと充実した内容を検討していただきたい。更に一歩進んだ連携、開発も重要ではないか。
- 受入れ態勢がきちっとならないと立派な発信をやっても駄目だから、そういう面での受け入れ態勢の整備が必要。これは施設の整備だけでなく、ハードソフト面も含めて考えていく必要がある。

### ▼地域・産業の連携、ネットワーク

- 業種・分野毎のネットワークはあるが、それぞれの地域・産業を結ぶネットワークがない。
- 農商工連携と言われながら、実際はその結びつきは弱い。まだ縦割りで物事が進められている。
- 観光協会とか、商店街とか、いろいろな組織の連携性が課題である。

- 市内事業者の顧客・取引先に対する、観光・物産情報の発信に取り組む必要がある。
- 全産業をつなぐ横のネットワーク化には事前の合意形成が重要。この会を種にしながら広げていく方が良い。
- 観光というのは裾野が広くてあらゆる産業を網羅しているわけですから、その面のネットワーク、横の連絡が必要。
- 全国発信の団体あるけれども、とにかく横が繋がらない
- 中央に本社がある事業所も相当鶴岡にあり、かなりの社員がいるので、鶴岡の美味しいお米のパンフレットでも良いので、アピールし、今後どんどん表に打って出ていく必要がある。
- 鶴岡信用金庫は、全国規模の会議には鶴岡のパンフを必ず持参し、是非来てくれと言っている。商工会議所は、常任委員全員に観光大使だよと言っている。各事業所がいろいろなところで取引があると思うので、そういう人たちに宣伝するだけで、相当な観光客、商品の販売促進にも繋がっていく。
- 商工会議所、農協、青年会議所、みんなネットワークの基盤を強固にしていかななくてはならない。例えば取引先に年1回請求書を送る時、資料を送る時に一緒に鶴岡の観光パンフレットを同封し一度社員旅行にどうですかというような観光とのマッチング、農協の農産物のリーフレットを送っても良いし、青年会議所のネットワークを活用するのも良い。
- 各種青年団体が集まっての情報交換、ビジネスマッチング、それぞれの団体の中では実例としてあるので、全市的に横断的にやるということは可能である

#### ▼鶴岡の情報発信

- 市民参加の観光、市民から県内外へ発信する手立てはないか。とにかく発信を出来るだけ多面的な方法でやる事が重要。
- 鶴岡の観光パンフレットはあまりにもありすぎてよく分からない。きっちり整理すべきでないか。分かり易さが大事でないか。
- パンフレットを作るときは共通にして庄内一円だとか庄内一本でやっていくべきである。
- 観光客は非常に多様化されてニーズに沿ったような対応の仕方が求められており、ある程度種類の多い数多くのパンフレットを出している。ただ、自然環境から何から素晴らしいと、市民がどれだけ理解して外にアピール出来るているかどうか、聞かれた場合どこに案内するか、その辺のやり方、環境づくりを検討しないといけない。
- 観光パンフレットにしても、全体を理解しながら対応出来るような、あるいは受入れが出来るような内容で、どこでも誰でも説明できるような資料なりパンフなりを作っていく必要がある。
- パンフレットを作るのが目的になっている。作って売り上げだったらどれくらい目標にするとか、減っている観光客を何とかするための目的意識をもったパンフレットを作るべきだ。
- 行政の役割としては、藤沢周平の話にしても、地元産品にしても、観光地にしても、しっかりしたパンフレットを作って、また検証可能な数値目標等立ててやるという形で取り組まないと、みんな我田引水になってしまう。
- 例えばガソリンスタンド SS 辺りやホームセンターとか、何か車で来た人が立ち寄れるコ

ーナーがあるといい。市の観光課が中心になってそういうのを集約していけないか。

- 庄内、鶴岡、酒田と言ってもわからない。このところで統一した名称的なもの、例えば、すべてにおいて庄内藩を入れた名称で売っていったらどうか。観光的なものに関しては、庄内藩という名称に統一していったら、見たときに庄内藩とはどういうところなのかとおのずと見方が違ってくるのではと思う。
- 商工会議所とか農協とか各種団体からなる、例えば第三セクターとして『庄内藩』という組織を作り、各団体のネットワークを利用して情報を集めて企画して営業活動をする、発信してもいいのでないか。例えば、庄内藩体験ツアー、庄内三大霊山パワースポットツアー、庄内藩伝統料理作り体験ツアーとか考えれば色んな企画が出てくる。そういう企画を練って、電話なり DM なりネットなり、そういうのを使って営業をしていく、収益活動をするような組織があるといい。

### ▼鶴岡らしさの発見・発掘

- 地域の機運を高める手段の一つに御角櫓があるので、商工会議所を中心にしながらも、是非この会でも情報発信していきたい。
- 城下町らしさの復元には、中心街の施設配置、景観整備などが重要である。
- 豊かな食文化など地域の特徴として出ていない。アピールの仕方に工夫が足りないのではないか。もっと文化としての掘り下げが必要である。
- イベントをやるというだけでなく、その土地ならではの、何らかの一步進んだものは出来ないか。
- 今、観光客はありきたりものには魅力を感じないので、この地域の歴史と文化と環境を如何に売っていくのか、庄内浜の魚もあまり量が獲れないので、こちらに取りに来てもらうとか、季節よって販売していくとか、そのような運動をもっともっと広めていかなければと感じている。
- 各地域の一品運動というものを、もう一度鶴岡でやることで隠れたものが表面に出て、相当な数になるのではないか。各地域の隠れた産物の掘り起こしを行うには、一品運動の復活が効果的である。山林地帯、中山間地域であれば、森林の文化的活動についても大事だし、例えば白山だだちゃ豆や湯田川孟宗のような一品運動は、地域全体の活性化につながることもなる。それぞれの地域にある産物をバックアップする協力体制として考えるべきではと思う。
- 集落ごとに既存された行事はいっぱいある。若い人達にも既存の行事にも参画していただきながら観光に結びつけるような行事を考えなければならない。例えば湯田川街道、田川・温海川方面、海岸方面へのルートがある。そういった行事あるいは山の物、海の物また歴史文化というのがいっぱいある。連携しながら行事を明確化してPRして県外から誘客をする。そういうシステムが考えられるのではないか。
- 庄内には科学館がない。出来れば子供達が常に身近な所で科学に触れられるような、そういったおもしろい子ども科学館を併設した商工会議所を作ってもらえればよい。
- 鶴岡のすごい高水準のハイレベルの世界に誇れる技術を持った会社がいっぱいあるので、そんな所の技術を紹介する場がほしい。

## ▼観光の拠点づくり

- 列車でも、飛行機でも、バスでも、その二次交通、足、その案内がすごい悪い。それに関連して観光案内をしてくれるような人が、ボランティアの観光ガイドさんとかお迎えをしてくれる人が、鶴岡の駅の前なんかにはいない。なんとか改善できないか。
- 駅前にも観光案内所あり、そこでガイドを紹介する手立はあるわけだが、ある程度市民からも、あるいは他から来た方も分かるような対応の仕方が求められている。
- 駅前にあるビジネスホテルがいっぱいある。あそこに泊まって駅の方から歩いてくる人が結構多い。
- 駅前に拠点を設けながらマリカ東館を生かす事も含めながら、駅前に人を呼ぼうとかさ、あそこを何とか活性化しようみたいなことを発信すべきでないか。
- 駅前のマリカ東館の1階の所に鶴岡のコーディネーターとして、観光ガイドや観光案内所を設置し、例えばそこに行けば貸し自転車もある、ガイドさんもいて、要望によってはタクシーの手配もしてくれるような、窓口があればいいのでないか。
- 観光案内所はもう一回見直すべきである。駅の中に3人いるんだったら、その人達を中心にして、マリカ東館に置くのもいいと思う。また、観光ガイドを常駐して、そこから派遣する手もある。
- 観光案内と庄内の特産品を一堂にしてみれる場所が駅前にあれば、あそこはすごい変わる。そこに行けば地域の農産物の加工品なり、そういう物を何でも良いものが買える。駐車場の設備や観光案内もしっかりあったら、すっかり変わると思う。観光については、最初にそこがいいよと紹介出来る。

## ▼鶴岡の街中の賑わい

- 中心市街地へ人を呼び込む工夫が必要である。
- 山王商店街でのまちキネと連携した取り組みに期待したい。
- 若者より高齢者のニーズに応えるような商店街づくりを進めたほうがよい。

## ▼若者の参加と支援

- 庄内では農業・漁業・林業・観光、それを一つずつばらばらには考えられない、この4つの柱がどうきちっと作られて行くか。こういうものを抜いてしまっただけでは、この地域の環境・産業・文化の活性化はありえない。農業・漁業・林業にどれだけ若い人達を組み込んでいけるか、参入していけるか、そういう施策が大事である。若い何かやろうする人が芽を摘まれないような支援の仕方は非常に重要である。
- 公益文科大学が山形市を会場にして飛島の観光資源など酒田地域の情報をまとめて発信するという。山形市は、芸工大と提携して、去年の花笠まつりでは、芸工大の生徒が案を出して実施したところ、飛び入り参加が爆発的に増えたと聞いている。若い人の意見をもっと取り入れることも検討しながら、各産業を結ぶネットワークの構築を考えてもよいのではないか。
- やはり活性化というのは若い人がもっといないと出来ない。その辺も含めて、いろんな産業、観光を考える必要がある。